

## 新刊 Book reviews

□中学生の道徳3年北海道版：かけがえのない君だから。B5. 160+(8) pp. 2012. ¥580. 学研. ISBN no number.

中学校の道徳の教科書の副読本。目次には35のトピックが四グループに分けて並んでおり、それぞれの内容あるいは教育目的を示すと思われる四つの色マークがついている。むかし習った修身の教科書のような感じだが、もちろん今日的話題や名の出た人物の逸話から、学習者の少年の身につけるべき心構えや教養を感じ取らせるように構成されている。伝説的な逸話は避けられ、比較的最近の、読者でもニュースとして知っているようなはなしが多い。北海道版はこの他に、地元に関係ある人物を二件取り上げている。その一人が小泉秀雄で、先に紹介した清水敏一：大雪山の父・小泉秀雄を引用して、彼の命懸けの調査研究を紹介している。もう一人は高田屋嘉兵衛である。教科書関係はしばしば市販の対象とならないが、本書も学研に問い合わせたところ、「一般の人には販売しない」とのことである。どんな風に書かれているか、図書館でなら見ることができるだろう。近頃の学生さんは、こんな道徳教育を受けて来たのかと、教室の現況と比較すると面白い。

（金井弘夫）

□大久保栄治、篠田授樹（編）：北富士組合有地自然ガイドブック B5. 214 pp. 2012. ¥1,500. 富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合. ISBN no number.

富士山北麓の、東富士五湖道路と国道138号（旧鎌倉往還）に挟まれた南北幅700m東西長4.5kmほどの地域を対象とする。北は忍野八海やハリモミ林、南は北富士演習場、東は山中湖、地名としては東から梨ヶ原、檜丸尾、土丸尾である。行くなら西端近くの道の駅富士吉田や富士山レーダードーム館が目印。ここは從来、近隣地域の入会地として利用されてきた人工林だが、時代の要請に従って森林と人の共生林、ふれあい地域として整備されつつある。その目的に合わせて地域内の動植物の調査を行い、自然観察ガイドブックとしてまとめたもので、多くの人々に利用してほしい…との組合長の序文がある。内容はカラー写真を多用して、動植物やそれらの生態や人との関わりについての話題を提供する一般向けの作品で

ある。この紹介記事を書くために奥付を見たら、発行者の住所や電話が記されていなかった。まわりの人達に勧められて「未熟でお恥ずかしいが…」と、限定私費出版という本もあるけれど、本書の性格がそれに当たるとは思わない。そこで本書をいただいた方にお願いして、連絡先を問い合わせてもらったところ、「やたらに広めたくないの、公表しない」という返事だったそうだ。価値が書いてあり、序文の趣旨に矛盾するような出版物を、公費で作るのだから気が知れない。郵便や電話の申し込みは受け付けない、ということかも知れないと、現地へ行ってみた。

道の駅富士吉田の南に接した共有林は、間伐が行き届いた中をチップを敷きつめた散策路が走っていて、人かけがなく気持ちがよい。その中に恩賜林組合林業センターのビルと憩いの家があった。資料展示ホールもあるのだが、閉鎖されていた。そして、憩いの家の売店には本書が置いてあり、「1,500円で購入できる」との紙片がつけてあった。奥付を見ながら「県外の人がほしいときはどこに申し込めばよいか」と尋ねたら、「恩賜林庭園を楽しむネイチャーガイド」というパンフレットをくれた。これに連絡先が書いてあるのだ。「庭園」というのは、これらの建物を中心として、芝生広場、洋式庭園、薬草園、遊具広場、散策路などの一般公開用の施設が整備されている一角を指しており、子供連れが三々五々やってきていて、知る人ぞ知るという感じである。全域の俯瞰写真をみると、ここは全体のほんの一部に過ぎない。この部分は、もともと多くの人が入り込むことを期待して整備しているのだから、「人が来過ぎたら困る」のならば、こんな人寄せ用のガイドブックを作らぬ方がよい。

富士山地域は世界文化遺産登録を運動中である。多くの場合、登録の目的は利用客の増加を見込んでのものと理解される。小笠原の例を見ると、登録の結果観光客が増加して地元を潤す一方、登録の目玉だった貴重な自然の破壊に、拍車をかけるおそれが指摘されている。その対策として、ビジターを制限するか保護策を強化するかとなれば、前者は捨てられまい。尾瀬では入山者数制限の声がしばしば上がるが、実行には移されない。無制限の立ち入りを見過ごした結果としてのあやめ平の惨状は、もう話題にならなくなってしまった。日光では観光開発の対策として、戦場ヶ原の真中に自動車道を通した結果、原の乾燥化が進

でいるのに、それを指摘する声は上がらない。「やたらに広めたくない」という心理には、そういう風になりたくないという先見の明が含まれていると理解され、一つの見識と思う。それならば、寄せ用のガイドブックよりは、長期的視点からの継続調査を企画するのが筋ではなかろうか。ここは入会地の人工林という絶好の条件を備えているので、多くの実験的調査の対象となり得るに違いない。富士山麓の森林の遷移を長期的に記録し続ければ、自然の遷移や気候の変化に基づくものほか、周辺地域における開発や利用形態の変化に基づく影響も反映されているだろう。環境庁は、100年かけて全国1,000箇所の環境変化を記録する事業「モニタリングサイト1000」を、日本自然保護協会を通じて展開している。保護組合が管理する森林は8,100haにおよび、本書の対象となる地域はその4%程度に過ぎないが、場所柄としては重要なスポットとなり得るだろう。何はともあれ、長期にわたる事業の第一回のまとめとして、位置付けられないだろうか。この次は、所産全種類のリストを期待したい。入手のための連絡先は次の通り。富士吉田市外二ヶ村恩賜国有財産保護組合。403-0005富士吉田市上吉田5605。Tel/Fax 0555-23-3425。http://www.onshirin.jp/

(金井弘夫)

□北川智子：ハーバード白熱日本史教室 新書判。190 pp. 2012. ¥680+税。新潮社。ISBN 978-4-10-610469-5 C0221.

1980年生まれの著者が、カナダ留学を経てハーバード大学の講師として、数人の学生がいるかいないかだった日本史の授業を、一挙に三桁の受講生を擁する大講座に発展させた物語。既成の考え方とやらわれない工夫と度胸と体力は見習いたいが、我が身にそれだけの資質が備わっていないことを、あらためて認識する羽目になった。それより私が興味持ったのは、学生による教師の評価が、大学側にとって重要な基準になっていることだ。学年の終わりに、教師の授業内容の評価と、その講義を下級生に推薦する程度を数値化したものを、学生の自由意志による無記名投票で大学（教師でなく）が集め、その集計が学内に開示され、次年度の授業選択と教師の評価（たとえば利用する教室の広さとか、助手を何人つけるかとか）に利用されている様子が説明されている。ここで「助手」というのは、学生の受講上の相談に個人的に

対応したり、宿題の評価を分担したり、教材の制作を手伝ったりするために、見込まれる受講者数に応じて選ばれた上級の現役学生のことである。学生に授業の感想を求めるしきたりは、日本の大学でも制度化されているところがあると聞いているし、個人的に行っている教師もいる。しかし、記名で求めると当たり障りの無いことしか書かないし、無記名だと提出数が少ない上に、無責任な書きなぐりが多く、ゲンナリするということを、だいぶ以前に新聞紙上で見たことがある。学生の無記名投票が、大学の方針や評価の選択に永らく用いられているということは、少なくともハーバード大の学生の、資質を物語っているのだと思う。ということは、日本でも大学以前の教育やしつけに、期待せねばならないということか？

(金井弘夫)

□小野有五：ヒマラヤで考えたこと 新書判。182 pp. 1999. ¥700+税。岩波書店。ISBN 4-00-500313-3 C0240.

ネパール・ランタン谷の氷河ボーリング調査に参加した氷河地形研究者が、現場と離れた麓の補給基地で、一人連絡係として日を過ごすうちに、一帯を永年調査している女性文化人類学者と出会い、二人の知見を総合した結果、カルカ（放牧地の一角にある小屋と塩くれ場）が、すべて旧い氷河堆石（モレーン）の場所と一致し、しかもランタン谷の住人が形成するいくつもの放牧集団（ツオーバ）が、互いに鉢合わせしないように、そして過放牧にならないように、次々とそれらを移動しながら利用していることを、発見したいきさつが記されている。著者自身は現場を訪れたことがなくても、氷河研究者の目で遠望すれば、モレーン（と単に書いてあるが、たぶん末端堆石）の様子と「植生」の違いで、カルカや放牧地の判別ができるそうだ。著者らは、そうやって住民が慎重に維持している微妙な自然環境が、自分らの調査を含めて観光利用のために破壊、汚染されつあることに気付き、ヒマラヤ環境保全のためのNGOを発足させた。少々古い本だが、異業種交流の成果として紹介する。

(金井 弘夫)

□田中 修：植物はすごい 新書判。236 pp. 2012. ¥840+税。中央公論新社。ISBN 978-4-12-102174-8 C1245.

毎年夏休みになると、NHKラジオで「夏休み

子ども科学電話相談」という、科学に関するあらゆる質問に答える番組が連日組まれ、動物・植物・地学をはじめ、分野別に数人の担当者がその場で回答する。辻褄の合わない質問でも、自分の専門外のことでも、とにかく子供を納得させるような説明をとっさに考える回答者は、よほど知識の集積があって、頭の回転が早くないと勤まらないだろうと感嘆する。全国でたくさんの質問者が待っているので、一人にあまり時間はかけられず、複雑な事象でも手短かにしゃべらねばならない。分かりきったことでも、最後は「すごいだろ！」と付け足して、質問をした子供を元気づける。著者はそういう回答者の一人として、ラジオでは切り詰めた話を、本書で丁寧に説明しようとしているのだろう。本書の「すごい」にはそういうニュアンスがあるので、常識的な現象に一々感動して…と思わぬ方がよい。植物分野のトピックを「自分のからだは自分で守る・味は防衛手段・病気になりたくない・食べつくされたくない・やさしくない太陽に抗して生きる・逆境に生きるしくみ・次の世代へ命をつなぐしくみ」の7章に整理して、物語っている。多くは私も知っている内容だが、新知識もたくさん仕入れられる。アジサイ中毒やヤマゴボウの話は、地域同好会誌の記事を読んでおいてくれれば、味付けに役立ったのにと思うが、これは無理な注文だろう。巻末に植物名索引があるとよかったです。

(金井弘夫)

□森田竜義(編著)：**帰化植物の自然史** B5. 288 pp. 2012. ¥3,000+税. 北海道大学出版会. ISBN 978-4-8329-8204-8 C3045.

1. 帰化植物の生活史戦略. 2. 帰化植物の孤独な有性生殖. 3. オランダミミナグサとミミナグサの比較生態学. 4. コスモポリタンな寄生植物アメリカネナシカズラの繁殖戦略. 5. 踏まれてもなお生き残る、オオバコとセイヨウオオバコの生活史戦略. 6. ミチタネツケバナの分布拡大過程をたどる. 7. 全世界の耕地で最近問題化してきたヒメムカシヨモギ. 8. セイタカアワダチソウは悪者か. 9. 鑑賞用水草ミズヒマワリの恐るべき増殖力. 10. 帰化能力を進化させた球根植物タカサゴユリ. 11. 雜種タンポポ研究の現在—見えてきた帰化種タンポポの姿. 12. シロツメクサのクローン成長と集団分化. の12章が、12人の研究者によって、それぞれの研究を踏まえて述べられている。帰化植物もひと頃のような「侵略者」「環境破壊者」「自然の攪乱者」というような見方ではなく、一つの植物種として、世界的な視点からその生活史を探り、生理的特性を分子レベルにまで突っ込んで明らかにするというような研究の積み重ねによって、「種」としての振舞の様々が明らかにされるようになった。「侵略と攪乱の生態学」という副題があるが、いわゆる在来種でも、こういう見方が深まればよいのに、と思う。

(金井弘夫)